TBS落語研究会　２０２１年１１月２６日（金）（第６４１回）
新・落語掌事典

田中優子

●道成寺もの（彌次郎）

江戸時代の軽口ものの咄あれこれと、上方落語『鉄砲勇助』の前半部分を貼り合わせ、そこによく知られた道成寺ものをパロディして後半に加えて本作が出来上がっている。道成寺の縁起（由来）では、奥州から熊野に来た若い僧が庄司の家に泊まり、その家の嫁に懸想された。嫁は大蛇となって日高川を渡り、道成寺の鐘に巻きついて僧を殺してしまう。この縁起は絵巻や絵解きで流布し、謡曲『道成寺』になった時には庄司の娘と山伏の話となり、浄瑠璃『道成寺現在蛇鱗』『日高川入相花王』となった時には安珍清姫という名前がついた。そこから長唄の名曲『京鹿子娘道成寺』や幕末の『紀州道成寺』などに展開する。「道成寺もの」とは、それらを指す総称である。道成寺と言えば「あぁ、あの話ね」という具合に、広く知れ渡った話はどんな物語や芸能にも使えるのである。

●落語の死骸（夢八）

落語には結構、死骸が出てくる。『らくだ』や『黄金餅』や『猫怪談』では、その死骸を焼き場に持って行こうとして、騒ぎが起こる。『粗忽長屋』や『永代橋』では自分の死骸を確認する、という不思議な成り行きだ。江戸時代においては病院ではなく家で死ぬ。死後も今のように葬儀社が手際よく運んでくれるわけではない。近所の人々が講を組んで、通夜を準備し坊さんを呼び葬儀の手伝いをする。焼き場や墓地まで行く時は自動車があるわけではないから「野辺送り」と言って、皆で運んで行くのである。死骸と対面する機会は今よりずっと多いわけだ。庶民の自死は腹を切るわけではなく、『身投げ屋』や『あたま山』のように身投げをしたり、この咄のように首を吊った。首吊り死体が出てくるのはこれ以外には『ふたなり』だけだが、数多い死骸咄の中でも気味悪いものである。

●間抜けな泥棒（転宅）

泥棒は、落語の登場人物としてほんとうによく出てくる。むろん死骸よりずっと多い。『夏どろ』『穴どろ』『釜どろ』『碁どろ』『めがね泥』『もぐら泥』『やかん泥』『両どろ』『杭盗人』『鯉盗人』『へっつい盗人』など、題名だけでそれとわかり、主人公となる演目も多い。泥棒と勘違いされるだけで本当はそうではない咄もあるが、この咄のようにころっと騙される人のよい泥棒のなんと多いことか。江戸時代では実際には、盗みに対して厳罰主義をとっていた。十両以上の金額か物の値段の集積が十両以上だった場合や、度重なる盗みの総額が十両以上だった場合、死罪になる。また初犯の場合は敲きだが、再犯では厳罰になる。盗みは次の犯罪への入り口だからである。それでも盗みは多かった。現代のように生活保護制度がないことで、行き詰まる人が多かったのだろう。

●市川右團次（まめだ）

この咄は三田純市（劇作家、小説家、芸能評論家）の新作落語で一九六六年に桂米朝のために書き下ろしたものだ。三田純市は大阪の道頓堀芝居茶屋「稲照」の長男として生まれ、放送・演芸作家となった。『道頓堀』で芸術選奨新人賞、『昭和上方笑芸史』で文部大臣賞を受賞している。芝居や話芸があふれる芝居茶屋に生まれ育ったからか、この演目は歌舞伎役者のケレン（早変わり、宙乗りなど曲芸的な芸）をテーマにしている。上方歌舞伎でケレンの名人と言えば市川右團次である。この演目では右團次の弟子で膏薬屋の右三郎という架空の人物を設定し、子狸と関わらせている。右三郎がトンボ切りに明け暮れる姿は、江戸時代に道頓堀の芝居茶屋「鶴屋」に丁稚奉公をした右團次自身の姿である。三田は芝居茶屋の歴史のなかに右團次を発見し、落語に生かしたかったのだ。

●喧嘩と仲直り（笠碁）

相手と二人で対峙する勝負事から口論となり、大喧嘩や戦いにまで発展した例は数多くある。囲碁のように記憶力と先を読む力が試され知識と判断力が勝敗の鍵を握るとなればなおさらである。人を夢中にさせ、理性的な判断を奪ってしまう魔力のようなものが、囲碁にはあるのだろう。その魔力に取り憑かれる原因は、ひとつは競争心だ。競争心は上達を促進する要因でもあるが、生き物の野性そのものでもある。野性が招いたことを理性が後始末をするのが仲直りだ。仲直りと簡単にいうが、これがなかなか難しい。相手への怒りと自らの愚かさへの後悔が入り交じり、長く尾を引くからだ。その証拠に、片方は相手に顔向けできず笠をかぶり、一方もまたまともに顔を見ることができないので、笠をかぶっていることに気がつかない。この咄は囲碁を嗜む上での心得を示しているようだ

**田中優子**（法政大学名誉教授、江戸東京研究センター特任教授）
法政大学社会学部教授、学部長、法政大学総長を経て現職。
専門は江戸時代の文学、美術、生活文化、アジア比較文化。
現代社会についての連載エッセイなどもある。
『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞
『江戸百夢』で芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞
その他著書多数。2005年紫綬褒章。